



本書は、ひきこもり者にとって必要な自立とは他者に頼らないことではなく、必要なケアを広く薄く調達することだと言う。そして、皆の前で自分のことなどを話すことを求められる、いわゆるブレゼンテーションや少人数で行うグループ学習については、ひきこもりの若者たちの多くが嫌いな教育のスタイルだと言う。発言できない者にとっては、自分の存在が「いてもいなくてもいいもの」になってしまうと言うのだ。子どもたちに任せておけば自主性が育つなどという安易なものではないと本書は警告する。

ICTについては、次のように述べる。似た境遇にある人がいると思っても、リアルな居場所足を運ぶのは非常に勇気がいる。そのように迷っている当事者にとっては、まずはオンラインで過去に行われた対話を視



ひきこもりの理解と支援 ——孤立する個人・家族をいかにサポートするか

高塚雄介 編著
2860円 遠見書房
☎0422-26-6711

聴することが役に立つ。そこでどんな話をしているのか、ただ聞いているだけでもいいのかなどを確認することができる。大丈夫そうであれば、自宅にないから参加することが可能になる。オンラインであれば、やめたいときはすぐにやめられる。著者は、ICTを活用することによって、ひきこもりの当事者が、対支援者や当事者同士でよりつながることができると期待する。

評者は考える。リアルな場において、一人で子どもの集団と対面する学校教育関係者にとっては、このような個人への対応は困難な面も多いだろう。教員以外の支援者との協働などが求められよう。同時に、個人の自立が困難な今日、教育における多様性の保障、個別最適化された学び、そしてその上での社会形成者の育成について、「わがこと」と捉え直して取り組む必要があると言えよう。

(前聖徳大学教授・西村美東士)